

訳注

訓讀説文解字注（十四）

森 賀 一 恵

富山大学人文科学研究第 80 号抜刷

2024年2月

訓讀說文解字注（十四）

森 賀 一 恵

「訓讀說文解字注（十三）」に續いて、段玉裁『說文解字注』を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀說文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に1) 2) 3)等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇上は『繫傳』では缺いている卷二十五に當るが、今本の異同について記す。

十三篇上

(虫部)

40b

𧈧，一名蝮^(一)，博三寸，首大如擘指^(二)，象其臥形^(三)，物之敷細，或行或飛^(四)，或毛或羸^(五)，或介或鱗，虫目爲象^(六)，凡虫之屬皆从虫，

虫，一名蝮，博さ三寸，首の大いさ擘指の如し，其の臥す形に象る，物の敷細なるもの，或いは行き或いは飛び，或いは毛或いは羸，或いは介或いは鱗，虫を目て象と爲す，凡そ虫の屬は皆な虫に从ふ，

(一) 『爾雅』釋魚に「蝮は虫」と。今本「虫」を「虺」に作る。¹⁾

(二) 釋魚の文。²⁾「擘指」は大指也。郭云く「此れ自ら一種の蛇，人自ら名づけて蝮虺と爲す。

1) 阮元本は「虺」に作る。釋文に「蝮，字亦作蝮，……」「虫，即虺字也，虛鬼反，說文云……，字林同，舍人亦云，蝮一名虺，案，蝮，大蛇也，非虺之類，故郭云，別自一種蛇名蝮虺，本今作虺」。阮元校勘記に「唐石經、單疏本、雪牕本同，釋文，……，按此為經作虫，注作虺之明證，唐石經以下諸本，俱係後人援注所改」。

2) 阮元本「蝮虺，博三寸，首大如擘」注「身廣三寸，頭大如人擘指，此自一種蛇名爲蝮虺」。阮元本經は「擘」下に「指」字無く注は「指」字が有る。經の疏に「博，廣也，首，頭也，擘，拇指也，此自一種毒蛇名蝮虺，身廣三寸，其頭大如人拇指」，また注の疏に「案舍人曰，蝮一名虺，江淮以南日蝮，江淮以北日虺，孫炎曰，江淮以南謂虺爲蝮，廣三寸，頭如拇指，有牙，最毒，郭璞曰，此自一種蛇，人自名爲蝮虺，今蛇細頸大頭，色如艾綬文，文間有毛，似豬鬣，鼻上有針，大者長七八寸，一名反鼻，如虺類，足以明此自一種蛇，如郭意，此蛇人自名蝮虺，非南北之異，蛇實是蟲，以有鱗，故在釋魚，且魚亦蟲之屬乎」。段注が引く郭注は疏引く所と異同のある箇所があるが，段注下文に郭注は『毛詩』斯干疏、『漢書』田儵傳注にも見えるとあり，それらをも參照したものとと思われる。

今蝮³⁾ 蛇は細頸、大頭、焦尾⁴⁾、色艾綬文の如し、文間に毛有り、猪鬣に似る、鼻上に鍼⁵⁾有り、大なる者は長さ七八尺⁶⁾、一名反鼻、虺の類に非ず。⁷⁾ 此れ以て此れ自ら一種の蛇なるを明かにするに足る」と。按ずるに此の注斯干の正義⁸⁾及び小顔の田儋傳注⁹⁾に見ゆ。郭意へらく、『爾雅』の「蝮」は今此の物無く、今の蝮蛇は『爾雅』の「蝮蛇」に非ざる也と。

(三)「虫」篆は臥し而して尾を曲ぐる形に象る。「它」篆下に「虫也、冤曲し尾を垂るる形に象る」と云ふ。¹⁰⁾ 許偉の切、十五部。

(四)「或飛」二字『爾雅』釋文¹¹⁾に依りて補ふ。

(五)「羸」衣部に見ゆ。「但也」。¹²⁾ 俗に「羸」に作るは非なり。

(六) 按ずるに「以て象と爲す」は以て象形と爲すを言ふ也。「虫」に从ふの字は多く左形右聲、左は皆な「虫」を用ひて象形と爲す也。月令、春に「其の蟲は鱗」¹³⁾、夏に「其の蟲は羽」¹⁴⁾、中央に「其の蟲は倮」,「虎豹の屬、恆に淺毛」¹⁵⁾也、秋に「其の蟲は毛」¹⁶⁾、冬に「其の蟲は介」¹⁷⁾と。許「或いは飛ぶ」と云ふ者は羽也。古へ虫蟲分かたず。故に「蟲」を以て諧聲するの字多く省

3) 『爾雅』疏、『毛詩』斯干疏は「今」下「蛇」上に「蝮」に無く、『漢書』田儋傳注は「今」を「其」に作るが、「蛇」上に「蝮」字が有る。

4) 「焦尾」は『爾雅』疏、『毛詩』斯干疏に無く、『漢書』田儋傳注にのみ見える。

5) 『爾雅』疏、『漢書』注は「針」に作る。

6) 『毛詩』疏、『漢書』注引く所同じ。『爾雅』疏は「尺」を「寸」に作る。

7) 『漢書』注引く所同じ。『爾雅』疏、『毛詩』疏は「非」を「如」に作り、「虺」下に「之」字無し。

8) 小雅。「維熊維羆，維虺維蛇」箋「熊羆之獸，虺蛇之蟲，此四者夢之吉祥也」の疏に「郭璞曰，此自一種蛇，人自名為蝮虺，今蛇細頸、大頭，色如文綬文，文間有毛，似猪鬣，鼻上有針，大者長七八尺，一名反鼻，如虺類，足以明此自一種蛇，如郭意此蛇人自名蝮虺非南北之異蛇實是蟲以有鱗故在釋魚且魚亦蟲之屬也」，阮元校勘記に「案綬上文字當作艾，爾雅疏即取此皆不誤」，「鼻上有針，（補）毛本斜作針」。

9) 「齊王曰，蝮蠹手則斬手，蠹足則斬足」顔注に「爾雅及說文皆以為蝮即虺也，博三寸，首大如擘，而郭璞云，各自一種蛇，其蝮蛇，細頸大頭焦尾，色如綬文，文間有毛，似猪鬣，鼻上有針，大者長七八尺，一名反鼻，非虺之類也」。

10) 十三篇下 8b 它部。段注本は「垂」を「丞」に作る。

11) 爾雅音義「釋蟲第十五」下に『說文』を引いて「虫一名蝮，象其形，物之微細，或行或飛，或毛或羸，或介或鱗，以虫為象」と。

12) 八篇上 63a に「羸，但也，裸，羸或从果」。二徐の説解は「但」でなく「袒」だが，段玉裁は「但，楊也」（八篇上 35a 人部）と「袒，衣縫解也」（八篇上 62b 衣部）を根據に「羸」だけでなく、「袒」「楊」の説解の「袒也」も「但也」に改める。

13) 鄭注「象物孚甲將解鱗，龍蛇之屬」。

14) 鄭注「象物從風鼓葉，飛鳥之屬」。

15) 「其蟲倮」鄭注。引用箇所上文に「象物露見不隱藏」。

16) 鄭注「象物應涼氣而備寒，狐貉之屬，生旃毛也」。

17) 鄭注「介，甲也，象物閉藏地中，龜鼈之屬」。

きて「虫」に作る。「融」¹⁸⁾「蝮」¹⁹⁾の如きは是れ也。鱗、介は「虫」を以て形と爲す。「螭」²⁰⁾「虬」²¹⁾「蝮」²²⁾「蚌」²³⁾の如きは是れ也。飛ぶ者は「虫」を以て形と爲す。「蝠」²⁴⁾「蝠」²⁵⁾の如きは是れ也。毛、羸は「虫」を以て形と爲す。「蝮」²⁶⁾「蝮」²⁷⁾の如きは是れ也。

41a

蝮，虫也^(一)，从虫羸聲^(二)，

蝮，虫也，虫に从ふ，羸の聲，

(一) 是れを轉注と曰ふ。「考」「老」の例也。招羸に曰く「蝮蛇藜藜たり」と。²⁸⁾

(二) 芳目の切，三部。玉裁按ずるに「虫」「蝮」二篆の説解，蓋し疑ひ有り焉。許「它」下の解に「虫也，虫に从ひ而して長し，冤曲し尾を蝮るる形に象る」と云ひ，²⁹⁾「虫」篆下の説に「其の臥す形に象る」と云ふ。然らば則ち虫は乃ち尾を蝮れざるの它，它是乃ち尾を蝮るるの虫。二篆實は一字也。乃ち「虫」を解して「蝮」と爲し，『爾雅』「博さ三寸，頭大いさ擘の如し」を援きて以て之れに實つ。『爾雅』の形に依れば，則ち頭廣さ一寸，身廣さ三寸，必ず四足の它にして乃ち此の形有り。而して許云ふ所の「其の臥するに象る」「其の冤曲して尾を蝮るるに象る」なる者は必ず無足の它にして四足の它に非ざる也。無足は它的常形爲り。故に其の臥するを「虫」と曰ひ，之を舒ばすを「它」と曰ふ。而して「龜」³⁰⁾「鼃」³¹⁾篆は「它」篆の上體に从ひ，亦た未だ嘗て「虫」篆の上體に非ざる也。然らば則ち「蝮」を以て「虫」を訓ずるは許の意に非ざるに似たり矣。況んや『爾雅』「蝮虫」は釋魚に在り。陸云く「今虬に作る」と。³²⁾ 其の形兒を尋ぬれば無足の它に非ず。諸書皆な至毒と云へば，則ち即ち『字林』謂ふ所の「蝮

18) 三篇下 10b 𩇑部「融，炊气上出也，从𩇑，蟲省聲，融，籀文融，不省」。段注「九部」。

19) 十篇下 3b 赤部「蝮，赤色也，从赤，蟲省聲」。段注「九部」。

20) 十三篇上 54a 「螭，若龍而黃，北方謂之地螭，从虫离聲」。

21) 十三篇上 54b 「虬，龍無角者，从虫丩聲」。

22) 十三篇上 55b 「蝮，蜃屬，有三，皆生於海，……，从虫合聲」。

23) 十三篇上 56a 「蚌，蜃屬，从虫丰聲」。

24) 十三篇上 61a 「蝠，蝙蝠，服翼也，从虫扁聲」。大徐本、祁刻本は「服翼」二字無し。

25) 十三篇上 61a 「蝠，蝙蝠，从虫冫聲」。大徐本、祁刻本は「蝙蝠」下に「服翼」二字有り。

26) 十三篇上 60a 「蝮，善援，禺屬，从虫爰聲」。

27) 十三篇上 60a 「蝮，如母猴，印鼻而長尾，从虫隹聲」。

28) 王逸『章句』に「蝮，大蛇也，藜藜，積聚之貌」。

29) 十三篇下 8b 它部。

30) 十三篇下 9a 龜部

31) 十三篇下 10a 鼃部

32) 注 1 引く『爾雅』釋魚「虫」釋文參照。

聽³³⁾の類。故に景純亦た今俗の「細頸大頭」の蝮它は『爾雅』の蝮它に非ずと云ふ。³⁴⁾許書「雖」³⁵⁾「虺」³⁶⁾「蜥」³⁷⁾「蝮」³⁸⁾「蜺」³⁹⁾「虻」⁴⁰⁾六篆同じく四足の者を以て類記す。蓋し許意らく、虫は無足の它爲り、虺は四足の它爲り、各おの相ひ涉らずと。『爾雅』古本「蝮虫」に作るは乃ち是れ「虫」を借りて以て「虺」と爲す。「博さ三寸、首の大いさ擘の如し」なる者は乃ち虺の形にして、虫の形に非ず。許書「虫」篆下「它也、其の臥す形に象る」に作り而して「蝮、虫也、虫に从ふ、復の聲」の云ひ無ければ、則ち文従ひ字順ふ矣。「蝮」字恐らく古へ『爾雅』祇だ「復」に作る。故に許に當に有るべからざるを知る。

41b

𧈧，神它也^(一)，从虫朕聲^(二)，

𧈨，神它也，虫に从ふ，朕の聲，

(校)「它」，大徐、祁刻本「蛇」に作る。

(一) 荀卿曰く「𧈧蛇は足無くして飛ぶ」と。⁴¹⁾『毛詩』段借して「𧈧」字⁴²⁾と爲す。⁴³⁾

(二) 徒登の切，六部。

𧈩，大它，可食，从虫𠂔聲^(一)，

𧈪，大它，食す可し，虫に从ふ，𠂔の聲，

(校)「它」，大徐、祁刻本「蛇」に作る。

(一) 人占の切，七部。

33) 『廣韻』入一屋・禄(盧谷切)小韻「蝮，蝮聽，似蜥蜴，居樹上，輒下齧人，上樹垂頭聽，聞哭聲乃去，出字林」。

34) 『爾雅』疏、『毛詩』疏、『漢書』注引く郭注(注2)および「虫」篆「博三寸，首大如擘指」段注(前頁)参照。

35) 十三篇上 42b 虫部「雖，倡蜥易而大」。二徐は「易」を「蜴」に作る。

36) 十三篇上 42b 虫部「虺，目注鳴者，詩曰，胡爲虺蜥」。二徐は「目(以)」上に「虺」字有り，「鳴」下に「者」字無し。

37) 十三篇上 43a 虫部「蜥，蜥易也」

38) 十三篇上 43a 虫部「蝮，在壁曰蝮，在艸曰蝮易」。

39) 十三篇上 43a 虫部「蜺，蝮也，……，一曰蝮蜺」。

40) 十三篇上 43a 虫部「虻，榮虻，它醫」。二徐は「它」を「蛇」に作る。

41) 『荀子』勸學篇。

42) 十三篇上 43b 「蝮，蟲食苗葉者，……」。

43) 小雅・大田「去其蝮蝮，及其蝮賊」傳「食心曰蝮，食葉曰蝮，食根曰蝮，食節曰蝮」釋文「蝮，字亦作蝮，徒得反，說文作蝮」。

蠶，蟻也^(一)，从虫董聲^(二)，

蠶，蟻也，虫に从ふ，董の聲，

(一) 釋蟲に曰く「蠶、蚘は^{テシ}蟹蚕」。⁴⁴⁾ 許謂らく，蠶也，蚘也，蟹蚕也，一物三名也と。「蚘」，許「蟻」に作る。

(二) 弃忍の切，十三部。

蟻，側行者^(一)，从虫寅聲^(二)，𧈧，蟻或从引，

蟻，側行する者，虫に从ふ，寅聲，𧈧，蟻或いは引に从ふ，

(一) 考工記「卻行、仄行」，鄭曰く「卻行は蟻衍の屬，仄行は蟹の屬」と。⁴⁵⁾ 許と異なる。今丘蚘を觀るに實に卻行し，側行するに非ず。鄭説長たる也。丘蚘は俗に「曲蟻」と曰ふ。⁴⁶⁾ 漢の巴郡に^{クジシ}胸忍縣有り。⁴⁷⁾ 此の蟲を以て名を得。「丘」^{キウ}「胸」^{キョウ}「曲」^{キョク}，一語の轉也。或いは胸忍を譌りて「胸忍」⁴⁸⁾と爲し，讀みて^{シユンジュン}蠢潤二音の如くす。⁴⁹⁾ 遠く之れを失せり矣。

(二) 余忍の切，十二部。

42a

蟻，蟻蟻^(一)，蟲在牛馬皮者^(二)，从虫翁聲^(三)，

蟻，蟻蟻，蟲の牛馬の皮に在る者，虫に从ふ，翁の聲，

(校)「蟻蟻」，大徐、祁刻本無し。

(一) 各本此の二字無し。今補ふ。

(二) 『爾雅』釋文『字林』を引きて「蟻蟻は^蟻に似る」「蟲の牛皮に在る者」と。⁵⁰⁾ 『字林』は『說

44) 釋文「蚕，他典反」。阮元校勘記に「蠶蚘蟹蚕，唐石經、單疏本、雪牕本、注疏本同，毛本蚕改蠶，蓋因蠶字俗省作蚕，因誤改此蚕為蠶也，釋文，蚕，他典反，……」。

45) 梓人。釋文「蟻衍，羊忍反，下如字，爾雅云，蟻衍入耳，郭璞云，蚘蟻也，案此蟲能兩頭行，是卻行，劉云，或作衍蚘，衍音延，今曲蟻也」。

46) 前注引く釋文參照。

47) 『漢書』地理志上。顏注「胸音劬」。

48) 「胸」「忍」は大徐新附字（肉部）。「胸，胸忍，蟲名，漢中有胸忍縣，地下多此蟲，因以爲名，从肉旬聲，考其義，當作潤蠢，如順切」「忍，胸忍也，从肉忍聲，尺尹切」。

49) 四篇下 33b 肉部「胸」段注に「漢巴郡有胸忍縣，十三州志曰，其地下溼，多胸忍蟲，因名，胸忍蟲即丘蚘，今俗云曲蟻也，漢碑、古書皆作胸忍，無異，不知何時胸譌胸，忍譌忍，闕駟上音春，下音閏，通典上音蠢，下音如尹切，廣韻則上音蠢，下音閏，而大徐乃於肉部增胸忍二篆，上音如順，下音尺尹，不知爲胸忍之字誤，且謂其地在漢中，又不知漢胸忍在今夔州府雲陽縣名萬戶壩者是，去漢中遠甚也」。「十三州志十卷（闕駟撰）」は『隋書』經籍志に著録がある。『訓讀說文解字注 石冊』「胸」字段注の訳注（p.1018）參照。

50) 『爾雅』釋蟲「蠶蟻，蟻蟻」注「蟻蟻也，俗呼蟻蟻」釋文「蟻，本亦作蟻，同，烏公反，字林云，說文云，蟲在牛皮者，說文云，蟻或蟻字省，息忠反」「蟻，寸東反，字林云，蟻蟻似蟻」。

文』に本づく也。郭氏『爾雅』注「蚣蝮，一に蜈蚣に作る。⁵¹⁾ 此れ蠶蝻、春黍を謂ふ。⁵²⁾

(三) 烏紅の切，九部。

蜈蚣，蜈蚣也，从虫從聲^(一)，

蜈蚣，蜈蚣也，虫に从ふ，從の聲，

(一) 子紅の切，九部。

蠶，知聲蟲也^(一)，从虫鄉聲^(二)，𧈧，司馬相如說从向^(三)，

蠶，聲を知る蟲也，虫に从ふ，鄉の聲，𧈧，司馬相如の説，向に从ふ，

(校)「説」，大徐、祁刻本「蠶」に作る。

(一) 十部に曰く「𧈧^{キツキョウ}は布く也」と。⁵³⁾ 釋蟲に曰く「國貉は蟲蠶」⁵⁴⁾、『廣雅』に曰く「土蛹は蠶蟲」⁵⁵⁾と。

(二) 許𧈧の切，十部。

(三)「鄉」「向」聲同じき也。按ずるに『春秋』の羊舌肸^{あざな}，字叔向，説く者，「向」は上聲に讀むと。⁵⁶⁾ 蓋し「向」なる者は「𧈧」の省也。肸蠶を以て名字と爲す。

𧈧，蟲也^(一)，从虫召聲^(二)，

𧈧，蟲也，虫に从ふ，召の聲，

(一) 蟲名を謂ふ也。按ずるに『玉篇』「𧈧^𧈧」を以て之れを釋するは非也。⁵⁷⁾「𧈧」自ら蟲名なり。下文「𧈧」下「𧈧^𧈧」⁵⁸⁾は別の一蟲名。凡そ單字もて名を爲す者は，雙字もて名を爲す者と相ひ牽混するを得ず。「𧈧^𧈧」は即ち「𧈧^𧈧」，以て「𧈧」を釋するを得ざる也。

51) 阮元本の經、郭注は「蚣」を「蜈」に作る(上注参照)。阮元校勘記は下注引く疏、前注引く釋文「蚣」下、『説文』「蜈」篆、「蜈」篆(本頁)下及び「蜈」篆下の記述を引き「此經作蜈蚣字，注作蜈蚣字，淺人據説文蜈蚣為一字，因改蜈為蜈，而不知此蜈為蜈之省而非蜈蚣字也」という。

52) 『爾雅』釋蟲「蠶蝻，蜈蚣」疏に「蠶蝻，周南作蝻斯，七月作斯蝻，雖字異文倒，其實一也，一名蜈蚣，一名蜈蚣，一名蜈蚣，陸機云，幽州人謂之春箕，春箕即春黍」。詳しくは「蜈」字説解、段注を参照。

53) 三篇上 6a「𧈧」説解。二徐の説解に「𧈧」字無し。段注に「李善注上林賦、甘泉賦，皆引𧈧布也，今據正」。

54) 注に「今呼蛹蟲為蠶，廣雅云，土蛹，蠶蟲」。

55) 釋蟲。

56) 襄公十六年傳「羊舌肸為傳」注「肸，叔向也」釋文に「叔向，許丈反」(養韻)(上聲)。『廣韻』では「向」は「許亮切」「式亮切」でいずれも漾韻(去聲)だが、釋文の「許丈反」だと「蠶」「𧈧」の「許𧈧切」と聲調も同じで同音になる。

57) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一「𧈧，丁么切，蜈蚣也，即𧈧蟲也」。

58) 十三篇上 51a「𧈧，𧈧，𧈧，𧈧也」。大徐本、祁刻本は「𧈧」を「𧈧」に作る。

（二）都侏の切，二部。

蠶，蟲也^(一)，从虫叟聲^(二)，

蠶，蟲也，虫に从ふ，叟の聲，

（一）蟲名を謂ふ。

（二）祖外の切，十五部。

42b

繭，繭蟲也^(一)，从虫甬聲^(二)，

蛹，繭蟲也，虫に从ふ，甬の聲，

（一）按ずるに許「繭」に於いて「蠶衣也」⁵⁹⁾と曰ひ、「絲」に於いて「蠶吐く所也」⁶⁰⁾と曰ひ、「蠶」に於いて「絲を任ふ蟲也」⁶¹⁾と曰ひ、「蠶」に於いて「蠶飛蠶に化する也」⁶²⁾と曰ふ。蛹の物爲るは、成繭の後、化蠶の前に在り。蠶と二物有るに非ざる也。文を立てて當に「繭蟲」と曰ふべからず、當に「繭中の蠶」と曰ふべし。乃ち先後をして貫珠の如く然ら使む。轉寫必ず譌亂有るを疑ふ。

（二）余隴の切。九部。

蠹，蛹也^(一)，从虫鬼聲，讀若潰^(二)，

蠹，蛹也，虫に从ふ，鬼の聲，讀みて潰^{クワイ}の若くす，

（一）釋蟲に見ゆ。『顏氏家訓』に曰く、『莊子』「蠹は二首」，「蠹」は即ち古への「虺」字，『古今字詁』に見ゆと。⁶³⁾按ずるに『字詁』原文必ず「古への蠹は今の虺」と曰ふ。許書を以て之れを律すれば，古字段借也。

（二）胡罪の切，十五部。

蝓，腹中長蟲也，从虫有聲^(一)，

蝓，腹中の長き蟲也，虫に从ふ，有の聲，

（一）戸恢の切，古音は一部に在り。⁶⁴⁾

59) 十三篇上 1a 糸部「繭」説解。

60) 十三篇上 40a 絲部「絲」説解。

61) 十三篇下 1a 蝻部「蠶」説解。二徐「蟲」字無し。

62) 十三篇下 1a 蝻部「蠶」説解。二徐は説解の「蠶」を「蟲」に作る。段注本は「化」を「匕」に改める。

63) 勉學篇に「吾初讀莊子蠹二首，韓非子曰，蟲有蠹者，一身兩口，爭食相齧，遂相殺也，茫然不識此字何音，逢人輒問，了無解者，案爾雅諸書，蠶蛹名蠹，又非二首，兩口貪害之物，後見古今字詁，此亦古之虺字，積年凝滯，豁然霧解」（諸子集成本に據る）。『隋書』經籍志に「古今字詁三卷（張揖撰）」の著録がある。

64) 「戸恢切」（灰韻）は今韻古分十七部表では十五部になるが，有聲は古十七部諧聲表では一部。

蟻，腹中短蟲也^(一)，从虫堯聲^(二)，

蟻，腹中の短き蟲也，虫に从ふ，堯の聲，

(一) 倉公列傳に「其の病を診て蟻瘕と曰ふ」と。⁶⁵⁾

(二) 如招の切，二部。

雖，侶蜥易而大^(一)，从虫唯聲^(二)，

雖，蜥易に侶て而して大なり，虫に从ふ，唯の聲，

(校)「易」，大徐、祁刻本「蜴」に作る

(一)「易」⁶⁶⁾各本「蜴」に作るは，誤り。今正す。此の字の本義也。借りて以て語書と爲す自り其の本義を知る者有ること尠なし矣。常棣に云く「良朋有りいよとと每も」，又た云く「兄弟有りと雖も」，傳に云く「每は雖也」と。⁶⁷⁾凡そ人其の欲を窮極するを恣睢と曰ふ。「雖」は即ち「睢」⁶⁸⁾也。按ずるに『方言』に守宮の「澤中に在る者，東齊海岱は之れをいよと蜥蜴と曰ふ」，注に云く「蜥易に似て大なり，而して鱗有り」と。⁶⁹⁾「蜥」字，疑ふらくは「睢」の誤りと。

(二) 息遺の切，十五部。

虺，吕注鳴者^(一)，詩曰，胡爲虺蜥^(二)，从虫兀聲^(三)，

虺，注を吕て鳴く者，詩に曰く，胡ぞ虺蜥爲らんと，虫に从ふ，兀の聲，

(校)「者」，大徐、祁刻本無し。

(一)「者」字，今補ふ。「注」なる者は「味」字⁷⁰⁾の段借。許考工記の文を用ふる也。梓人の職に云く「注を以て鳴く者」，鄭云く「精列の屬」と。許と同じからざる也。上文「雖」下に「蜥易に似る」と云ひ，下文「蜥」下に「蜥易」と云へば，則ち虺は蜥易の屬爲るを知る可し矣。今『爾雅』以て虫蝮の字と爲す。⁷¹⁾

65) 今本は「病」を「脈」に作る。『史記正義』に「人腹中短蟲」。

66) 九篇下44a易部「易，蜥易、蜥蜴、守宮也，象形」。

67) 小雅。常棣 傳に「每」の訓は無く，箋に「每有，雖也」。小雅・皇皇者華「每懷靡及」傳に「每，雖」。阮元校勘記に「每有雖也，箋用釋訓文，皇皇者華正義云，下篇每有良朋之下有每雖之訓，乃槩括此，箋不當據之刪也，下箋云，雖有善同門來，雖即每有也，雖下之有非經中之有，……○按舊校非也，無有字爲是，箋正用皇皇者華傳」。

68) 四篇下7a目部「睢，仰目也」段注「又恣睢，讀去聲，暴戾也」「許惟切，十五部」。

69) 卷8。『校箋』は注の「而大」を「大而」に作り「玉燭寶典引此文作『似蜥蜴而大有鱗』，集韻蜥下引作『似蜥易而大有鱗』，今本大而二字誤倒，當玉燭寶典及集韻校正」。

70) 二篇下27b口部「味，鳥口也」。

71) 釋魚に「蝮虺，博三寸，首大如擘」。「蝮（蝮）」字段注(p.155)參照。

(二) 小雅節南山の文。今『詩』「蜥」を「蜴」に作る。「蜴」は即ち「蜥」字也。⁷²⁾

(三) 許偉の切，十五部。

43a

𧈧，蜥易也^(一)，从虫析聲^(二)，

蜥，蜥易也，虫に从ふ，析の聲，

(一) 「易」下に「蜥易は蠖蜺，蠖蜺は守宮也」と曰ふ⁷³⁾は、之れを渾言し、此こに蜥易、蠖蜺、榮蜺を分別して三と爲すは、之れを析言する也。『方言』に曰く「守宮，秦晉西夏或いは之れを蠖蠃と謂ひ、或いは之れを蜥易と謂ふ」と。⁷⁴⁾

(二) 先擊の切，十六部。「蜥」亦た「蜴」に作る。『詩』「胡ぞ虺蜥爲らん」，今「虺蜴」に作る。其の音同じ也。⁷⁵⁾

𧈩，在壁曰蠖蜺，在艸曰蜥易^(一)，从虫匿聲^(二)，𧈪，蠖或从𧈩，

蠖，壁に在るを蠖蜺と曰ひ，艸に在るを蜥易と曰ふ，虫に从ふ，匿の聲，𧈪，蠖或いは𧈩に从ふ，

(一) 之れを析言す。

(二) 於殄の切，十四部。

𧈫，蠖蜺也，从虫廷聲^(一)，一曰蠖蜺^(二)，

蜺，蠖蜺也，虫に从ふ，廷の聲，一に曰く，蠖蜺と，

(一) 徒典の切，古音は十一部に在り。⁷⁶⁾

(二) 「一に曰く」は一名を謂ふ也。

𧈬，榮蜺^(一)，它醫^(二)，呂注鳴者^(三)，从虫元聲^(四)，

蜺，榮蜺は它醫，注を呂て鳴く者，虫に从ふ，元の聲，

72) 小雅・節南山之什・正月「胡爲虺蜴」傳「蜴，蜥也」。釋文に「蜴，星歷反，字又作蜥，蜥也」。『詩經小學』卷19胡爲虺蜴「說文，易，蜥易、蠖蜺、守宮也，象形，在壁曰蠖蜺，在艸曰蜥易，按說文無蜴字，方言守宮或謂之蜥易，其在澤中者謂之易蜴脈蜴，郭注蜴皆音析，蓋蜴即蜥之或體，易蜴即蜥易之倒文，猶螽斯亦曰斯螽也，說文虺下引詩胡爲虺蜥，今詩作胡爲虺蜴，蜴當讀析，虺蜴即虺蜥也，俗用蜴成文爲重複，古人言蜥易，釋文蜴字又作蜥」。

73) 「易」說解は「蠖蜺」を重ねない。上注66參照。『爾雅』釋魚に「蠖蜺，蜥蜴。蜥蜴，蠖蜺。蠖蜺，守宮也」，郭注に「轉相解，博異語，別四名也」。

74) 卷8。

75) 注72參照。

76) 廷聲は古十七部諧聲表で十一部だが，徒典切（銑韻）は今韻古分十七部表で十二部。

(校)「它」, 大徐、祁刻本「蛇」に作る。

(一) 逗。

(二) 榮蚘の異名也。釋魚に曰く「螻蝓は蜥易也」。⁷⁷⁾ 小雅節南山の傳に曰く「蜴は蝓也」と。⁷⁸⁾ 「蜴」當に「易」に作るべし。「蝓」當に「蚘」に作るべし。「榮蚘」或いは「蚘」と單評す。『史記』, 龍の「榮化して玄蚘と爲り以て王の後宮に入る」⁷⁹⁾ は是れ也。『方言』に曰く「其の澤中に在る者は之れを易蜴(音析)と謂ひ、南楚は之れを蛇醫と謂ひ、或いは之れを螻蝓と謂ひ、東齊海岱は之れを螻蝓と謂ふ」と。⁸⁰⁾

(三) 虺と皆な味を以て鳴くを謂ふ也。

(四) 愚袁の切、十四部。

43b

蠶, 蟲也^(一), 一曰大螫也^(二), 讀若蜀都布名^(三), 从虫瞿聲^(四),

蠶, 蟲也, 一に曰く、大螫也, 讀みて蜀都の布の名の若くす, 虫に从ふ, 瞿の聲,

(一) 蟲名を謂ふ。未だ何物かを詳らかにせず。釋蟲に「蠶、輿父は守瓜」有り。

(二) 「螫」なる者は「蟲毒を行ふ也」。⁸¹⁾ 「大螫」なる者は大いに毒を行ふ也。

(三) 糸部に曰く「蠶は蜀の細布也」と。⁸²⁾ 此れ「大螫」の讀みて「蠶」の若くするを謂ふ。

(四) 巨貪の切、十四部。

螟, 蟲食穀心者, 吏冥冥犯法即生螟^(一), 从虫冥, 冥亦聲^(二),

螟, 蟲の穀心を食する者, 吏冥冥に法を犯せば即ち螟を生ず, 虫冥に从ふ, 冥亦た聲,

(校) 大徐、祁刻本「心」を「葉」に作り, 「虫」下「冥」上に「从(從)」字有り。

(一) 「心」各本「葉」に譌る。今『開元占經』⁸³⁾ に依りて正す。釋蟲⁸⁴⁾、毛傳⁸⁵⁾ 皆な曰く「心を食するを螟と曰ひ、葉を食するを蠶と曰ひ、根を食するを蝨と曰ひ、節を食するを賊と曰ふ」と。

77) 阮元本は「易」を「蜴」に作る。注 73 引く釋魚參照。

78) 注 72 參照。

79) 周本紀。今本は「蚘」を「龍」に作る。索隱に「亦作蚘, 音元, 玄蚘, 蜘蜴也」。

80) 卷 8。

81) 十三篇上 53b。

82) 十三篇上 34b。

83) 四庫全書本卷 120 「蝗生」に『說文』を引き「螟, 蟲食穀心, 從冥聲, 吏冥冥犯法即生螟」と。

84) 原文は「食苗心螟, 食葉蠶, 食節蝨, 食根蝨」。釋文に「蝨, 字又作蝨, 又作蝨, 同, 徒得反, 蟲合葉者, 說文云, 蟲食草業者, 吏乞貸, 即生蝨」, 黃焯『彙校』は「蝨」を「蠶」に作り, 「宋本作蝨, 正文石刻作蠶, 單、蜀、吳、瞿、雪、陸、鄭諸本皆同」, 張一弓點校本注に「[合]作[食]」。

85) 小雅・大田「去其螟螣, 及其蝨賊」傳。阮元本は「蝨」を「蝨」に作る。釋文に「蝨, 字亦作蝨, 徒得反, 說文作蠶」, 黃焯『彙校』に「蝨字宋本已誤。阮云, 當作蝨。集韻二十五德載蝨蝨蝨蝨四形, 可證」。

「吏冥冥に法を犯せば即ち螟を生ず」と云ふは、正しく心を食すと爲して之れを言ふ。惟れ心を食するなり、故に「虫」「冥」に従ひて會意す。

(二) 此れ宋本及び小徐本に従ふ。莫經の切、十一部。按ずるに鉉本此の下に於いて妄りに「又た螟蛉」三字を増す。⁸⁶⁾ 宋本無き所、且つ「螟蠃は桑蟲也」。⁸⁷⁾ 下文に見ゆ。字「蛉」に作らず。

𧈧、蟲食苗葉者^(一)、吏气賁則生蠃^(二)、从虫賁、賁亦聲^(三)、詩曰、去其螟蠃^(四)、

蠃、蟲の苗葉を食する者、吏气賁すれば則ち蠃を生ず、虫賁に従ふ、賁亦た聲、詩に曰く、其の螟蠃を去ると、

(校) 大徐、祁刻本「蠃」を「蠃」に作り、「气」を「乞」に作り、「賁」を「貸」に作る。

(一) 『爾雅』⁸⁸⁾、毛傳⁸⁹⁾に見ゆ。

(二) 「賁」各本「貸」に作る。今正す。「气」、「賁」皆な求むる也。貝部に曰く「賁は人従り物を求むる也」と。⁹⁰⁾ 冥螟、賁蠃皆な疊韻。『左傳』に曰く「妖は人に由りて興る也人譽無くんば、妖自ら作らず」と。⁹¹⁾ 故に螟、蠃、蝻の害皆な吏に由る。鄭大田に箋して云く「明君は己を正すを以て之れを去る」と。己を正して去る可ければ、則ち正さざれば招く可し。李逡、孫炎皆な「政の致す所」に由ると謂ふ也。⁹²⁾

(三) 各本、篆を「蠃」に作り、解を「虫貸に従ふ、貸亦た聲」に作る。今正す。徒得の切、一部。「騰」字を段りて之れと爲す。一部は六部と合聲する也。⁹³⁾

(四) 小雅大田の文。今『詩』「騰」に作るは段借字也。

86) 孫本にはこの三字は無い。鈕樹玉『說文解字校録』に「宋本及繫傳無此三字」、姚文田・嚴可均『說文校議』に「毛本別改作从虫冥聲又螟蛉、蓋依五音韻譜」。『汲古閣說文訂』「螟、从虫、从冥、冥亦聲、莫經切」下に「初印本如此、……、宋本、葉抄本、宋刊五音韻譜皆同、今剗改云、从虫冥聲又螟蛉、以合趙鈔本及近刊五音韻譜、依許書大例、螟蠃不當添、如蜻篆下不云又蜻蛉是也、且不作螟蠃而作螟蛉、果何說乎」。

87) 十三篇上虫部「蠃」說解。

88) 釋蟲。注 84 參照。

89) 小雅・大田傳。注 85 參照。

90) 六篇下 16b。段注に「從人猶向人也、謂向人求物曰賁也、按代弋同聲、古無去入之別、求人施人、古無賁貸之分、由賁字或作貸、因分其義、又分其聲、如求人曰乞、給人之求亦曰乞、今分去訖、去既二音」。「賁」篆の一つ前が「施也」と訓じられる「貸」である。會意の要素としては「貸」より「賁」が相應しいということか。

91) 莊公十四年傳。

92) 大田傳「食心……曰賊」疏に「郭璞直以蟲食所在為名、而李逡、孫炎並因託惡政、則災由政起、雖食所在為名、而所在之名緣政所致、理為兼通也」。

93) 古十七部諧聲表に依れば、弋聲は一部、朕聲は六部。『六書音均表』二・弟六部與弟一部同入說到「弟六部與弟一部合用最近、其入音同弟一部、如得來之爲登來、螟蠃之爲螟騰、得蠃在弟一部、登騰在弟六部也、陸韻以職德配蒸登、非無見矣」。

44a

𧈧, 蝨子也^(一), 一曰, 齊謂蛭曰蟻^(二), 从虫幾聲^(三),

蟻, 蝨の子也, 一に曰く, 齊は蛭を謂ひて蟻と曰ふと, 虫に从ふ, 幾の聲,

(一) 「蝨」は「人を齧る蟲也」。⁹⁴⁾ 「子」は其の卵也。『戰國策』「幾瑟」に作る⁹⁵⁾ は段借字。

(二) 釋魚「蛭は蟻」注に曰く「今江東水中の蛭蟲の人肉に入る者を呼びて蟻と爲す」と。

(三) 居豸の切, 十五部。

𧈩, 蟻也^(一), 从虫至聲^(二),

蛭, 蟻也, 虫に从ふ, 至の聲,

(一) 此れ上の「蟻」字第二義を蒙りて之れを釋す。後人移す所に似たり。原書當に是に在るべからず。水蛭なる者は今の馬黃。既に是れ水物。當に下の「蛟」「螭」「虬」「蝮」⁹⁶⁾ と類を爲すべし。「蛭は蟻」は釋魚の文。

(二) 之日の切, 十二部。

𧈪, 蛭蟻^(一), 至掌也^(二), 从虫柔聲^(三),

蟻, 蛭蟻は至掌也, 虫に从ふ, 柔の聲,

(一) 逗。

(二) 釋蟲の文。郭云く「未だ詳らかならず」と。『本艸經』に「水蛭は味鹹し, 一名至掌」と。⁹⁷⁾ 是れ名醫 即ち水蛭と謂ふ也。

(三) 耳由の切, 三部。

𧈫, 蝮蝮^(一), 蝮也^(二), 从虫吉聲^(三),

蝮, 蝮蝮は蝮也, 虫に从ふ, 吉の聲,

(一) 逗。

(二) 釋蟲に曰く「蝮は蝮蝮也」, 郭云く「水中の蠹蟲」と。⁹⁸⁾ 按ずるに下文に「蝮は蝮蝮也」

94) 十三篇下 1b 蝮部。

95) 韓策二に「韓公叔與幾瑟爭國」など二十數見。『史記』韓世家は「蟻蝨」に作る。

96) 十三篇上 54a に「蛟, 龍屬, 無角曰蛟」「螭, 若龍而黃」, 54b に「虬, 龍無角者」「蝮, 它屬也」。

97) 『本艸』の概略は『訓讀說文解字注 金冊』p.378 の艸部注(105)に詳しい。『重修政和證類本草』卷 22 蟲部下品「水蛭」條に白抜き文字(『神農本草』由來)で「水蛭, 味鹹, ……」, 黒字(『名醫別錄』由來)で「一名至掌」と見える。

98) 阮元本經は「也」字無く, 注は「水」を「木」に作る。疏も注を引いて「木」に作る。また釋蟲下文に「蝮蝮, 蝮」注に「在木中」疏に「上文蝮蝮, 郭云木中蠹」。また十三篇下 3a 蝮部に「蠹, 木中蟲」。鈕樹玉『段氏說文注訂』に「水當作木」。

と。⁹⁹⁾ 何を以て類記せざるかを識らず。

(三) 去吉の切，十二部。

𧈧，蝓蝓也^(一)，从虫出聲^(二)，

蝓，蝓蝓也，虫に从ふ，出の聲，

(一) 區勿の切，十五部。今『爾雅』「蝓」に作る。¹⁰⁰⁾

𧈩，白魚也^(一)，从虫覃聲^(二)，

蟬，白魚也，虫に从ふ，覃の聲，

(一) 今衣書中の白蟲 粉 銀の如き者有るは是れ也。一名蛎魚。『本艸經』は之れを衣魚と謂ふ。¹⁰¹⁾

(二) 余箴の切，七部。

𧈪，丁𧈪^(一)，負勞也^(二)，从虫至聲^(三)，

𧈪，^{テイケイ}丁𧈪は負勞也，虫に从ふ，至の聲，

(一) 逗。疊韻。

(二) 釋蟲の文。郭曰く「即ち蜻蛉也。江東 狐梨と呼ぶは未だ聞かざる所」と。¹⁰²⁾ 按ずるに許の意は蜻蛉に非ざる也。許下文「蛉」下に云く「蜻蛉也，一名桑根」と。¹⁰³⁾ 此と伍を爲さざれば，則ち許の意は蜻蛉を謂はざること知る可し。

(三) 戸經の切，十一部。

44b

𧈫，毛蠹也^(一)，从虫召聲^(二)，

蝻，毛蠹也，虫に从ふ，召の聲，

99) 十三篇上 45a。

100) 釋蟲。前頁「蝓」篆段注參照。

101) 『爾雅』釋蟲「蟬，白魚」郭注に「衣書中蟲，一名蛎魚」疏に「此衣書中蟲也，一名蟬，一名白魚，一名蛎魚，本草謂之衣魚，是也」。段注は釋蟲の疏に據ったのだろうが、『重修政和證類本草』卷 22 蟲部下品に白抜き文字（『神農本草』由來）で「衣魚，味鹹，……，一名白魚」，黒字（『名醫別錄』由來）で「一名蟬（音談）」と見える。

102) 阮元本は「丁」を「疋」に作る。

103) 十三篇上 51b。説解は「名」を「日」に作る。

(一) 釋蟲の文。¹⁰⁴⁾「蠹」なる者は「木中の蟲」¹⁰⁵⁾也。蝮は木中に居り、其の形は外に毛有り、能く木を食す。故に毛蠹と曰ふ。是れ蝮爲り。蝮の言は陷^{カク}¹⁰⁶⁾也。

(二) 乎感の切、八部。

蟊，蟲也^(一)，从虫喬聲^(二)，

蟊，蟲也，虫に从ふ，喬の聲，

(一) 蟲名を謂ふ。按ずるに上「蝮」下「載」は同類也。則ち蟊は當に亦た蝮載^{のみ}の類なる耳。

(二) 居夭の切、二部。

蝮，毛蟲也^(一)，从虫戔聲，讀若筍^(二)，

載，毛蟲也，虫に从ふ，戔の聲，讀みて筍の若くす，

(校) 大徐、祁刻本「讀若筍」三字無し。

(一) 毛蠹と曰はざる者は、木中に居らず但だ葉を食すれば也。釋蟲に云く「蠹は蝮蝮」，郭云く「載の屬也，今青州の人載を呼びて蝮蝮と爲す，孫叔然八角の蝮蟲と云ふは之れを失す」と。按ずるに今俗に「刺毛」と云ふ者は是れ也。木の葉を食し，體に棱角有り毛有り采色有り，毛能く人を螫す。叔然の説誤らざる也。其れ老ひて而して蛹に成れば，則ち外に殼有りて，雀卵の如く然り。『本艸經』之れを雀甕と謂ふ。或いは出でて蛾と成り子の蠶子の如きを放ち，或いは即ち殼中に卵育す。故に『本艸』に云く「雀甕は蝮蝮の房也」と。「蝮蝮」は音聳^{センシ}¹⁰⁷⁾

(二) 三字『爾雅』の釋文¹⁰⁸⁾に依りて補ふ。千志の切、一部。『本艸』は「蝮」に作る。音同じ。

蠹，蠹也^(一)，从虫圭聲^(二)，

蠹，蠹也，虫に从ふ，圭の聲，

(一) 『史記』律書「北して蠹に至る，蠹なる者は毒螫して萬物を殺すを主る也，蠹し而して之れを藏す，九月也」と。¹⁰⁹⁾

104) 郭注に「即載」。

105) 十三篇下 3a 蝮部「蠹」説解。

106) 十四篇下 4a 冑部「陷，高下也」段注に「凡深没其中曰陷」。

107) 『重修政和證類本草』卷 22 蟲部下品「雀甕」條。「雀甕」は白抜き文字『神農本草』由來，「蝮(音聳)蝮房也(音斯)」は黒字(『名醫別録』由來)。

108) 釋蟲「蝮，毛蠹」注「即載」釋文に「載，毛志反，說文云，毛蟲也，讀若筍，……」。

109) 今本は「蠹」を「奎」に作る。『集解』に「徐廣曰，一作蠹」。

（二）烏蝸の切，十六部。『篇』¹¹⁰、『韻』¹¹¹ 皆な口圭の切と。¹¹²

45a

𧈧，𧈧也^(一)，从虫氏聲^(二)，

𧈧，𧈧也，虫に从ふ，氏の聲，

（一）此の篆は「蝮の子」の「𧈧」¹¹³と廻かに別なり。『孟子の書』當に是れ「𧈧」¹¹⁴なるべし，「𧈧」は即ち「𧈧」，大夫 𧈧𧈧を以て名と爲す也。

（二）巨支の切，十六部。

𧈧，毒蟲也^(一)，象形^(二)，𧈧，𧈧或从𧈧^(三)，

𧈧，毒蟲也，象形，𧈧，𧈧或いは𧈧に从ふ，

（一）『左傳』に曰く「蠶毒有リ」¹¹⁵，『詩』に曰く「卷髮 蠶の如し」¹¹⁶，『通俗文』に曰く「蠶の長尾なるは之れを蠶と謂ふ。蠶毒 人を傷なふを𧈧と曰ふ。𧈧は張列の反，或いは蜚に作る」と。且聲。且聲に非ざる也。¹¹⁷

（二）按ずるに「虫に从ふ，象形」と曰はず而して但だ「象形」と曰ふ者は，「虫」篆に尾有り，其の尾に象れば也。蠶の毒は尾に在り。『詩』の箋に云く「蠶は蝮蟲也。尾末は捷然として，婦人の髮末 上げ曲げて卷くが似く然り」と。¹¹⁸ 其の字の上は本と「萬」に从はず，「苗」を以て其の身首の形に象る。俗に「萬」に作るは非，且つ牡蠣の字¹¹⁹と混ず。丑芥の切。按ずるに『字林』「他割の反」¹²⁰，玄應の書「他達の切」¹²¹は皆な舊音也。十五部。

110) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一に「𧈧，口圭反，蠶也」。

111) 上平十二齊・睽（苦圭切）小韻に「𧈧，蠶也」。

112) 古十七部諧聲表で圭聲は十六部だが，今韻古分十七部表で麻韻（烏蝸切）は十七部，齊韻（口圭切，苦圭切）は十五部。

113) 十三篇上 47a に「𧈧，蝮子也」。

114) 公孫丑下。

115) 僖公二十二年傳。疏に「通俗文云，蠶長尾謂之蠶，蠶毒傷人曰𧈧，張列反，字或作蜚」，阮元校勘記に「宋本張列反三字作雙行」。釋文に「蠶，勅邁反，一音勅戒反，字林作蠶，丑介反，又音他割反」。

116) 小雅・都人士

117) 今韻古分十七部表で薛韻（張列反）は十五部，古十七部諧聲表で且聲は十四部，且聲は五部，折聲は十五部。『六書音均表』二・第十三部第十四部與第十五部同入説に「第十三部、第十四部與第十五部合用最近，其入音同十五部」。

118) 上文引く都人士箋。阮元本は「上曲」を「曲上」に作る

119) 十三篇上 56a 「蝸，蚌屬，……」。

120) 『左傳』僖公二十二年傳釋文引く。（注 115 參照）

121) 玄應『一切經音義』卷 5 七佛神呪經第四卷「蠶製」，卷 7 集一切福德經中卷「蠶製」，卷 15 十誦律第三十八卷「蠶製」，卷 20 陞羅尼雜集經第七卷「蠶製」下に「他達反，下勅達反」。

(三) 蠍尾に單鉤なる者有り，雙鉤なる者有り，故に「或いは蠍に从ふ」。

𧈧，蝥蠡也^(一)，从虫酋聲^(二)，

蝥，蝥蠡也，虫に从ふ，酋の聲，

(一) 『詩』衛風「領は蝥蠡の如し」傳に曰く「蝥蠡は蝥蟲也」と。¹²²⁾『爾雅』同じ。¹²³⁾按ずるに下文に云く「蝥は蝥蠡也」¹²⁴⁾と。然らば則ち二者轉注爲り。

(二) 字秋の切，三部。

𧈩，齋蠡也^(一)，从虫夊聲^(二)，

齋，齋蠡也，虫に从ふ，夊の聲，

(一) 釋蟲「蝥蠡は蝥」，郭云く「木中に在る者」¹²⁵⁾，「蝥は蝥蠡」，郭云く「糞土中に在る者也」¹²⁶⁾と。是の二者同じきに似て異なる。宋の掌禹錫、蘇頌亦た蝥蠡は蝥蠡、蝥と同じからざるを辯つ。¹²⁷⁾許の意は蝥蠡、蝥を一物と爲すと謂ひ、而して「蝥蠡」下「蝥也」と云はず。蓋し亦た一物と謂はず矣。

(二) 徂兮の切，十五部。

𧈪，蝥蠡也^(一)，从虫曷聲^(二)，

蝥，蝥蠡也，虫に从ふ，曷の聲，

(一) 釋蟲に曰く「蝥，桑蠡」と。¹²⁸⁾桑中の蟲也。按ずるに上文許「蝥蠡は蝥也」と云ひ，¹²⁹⁾此れに類廁せざる者は，許の意蝥蠡は別に一物と爲す也。蓋し類を一にして種別なる者多し矣。

(二) 胡葛の切，十五部。

122) 衛風・碩人

123) 釋蟲に「蝥蠡，蝥」。

124) 十三篇上45a。

125) 阮元本は「者」字が無い。

126) 阮元本は「者也」二字が無い。

127) 『重修政和證類本草』卷21 蟲部中品「蝥蠡」條に「臣禹錫等謹按，蜀本注云，今據爾雅蝥蠡，注云在糞土中，經亦云一名蝥蠡，又云，生積糞草中，則此外恐非也，今諸朽樹中蠹蟲，俗通謂之蝥，莫知其主療，……」，また「圖經曰，蝥蠡主河内平澤及人家積糞草中，今處處有之，……，此爾雅所謂蝥蠡，郭璞云在糞土中者是也，而諸朽木中蟲形亦相似，但潔白於糞土中者，即爾雅所云蝥蠡，又云蝥蠡，又云蝥桑蟲，郭云，在木中錐通名蝥，所在異者是此也，……」。『宋史』藝文志六・子類三・醫書類に「党禹錫嘉祐本草二十卷」(校勘記に「党禹錫，郡齋志卷一五補注神農本草條，書錄解題卷一三大觀本草條都掌禹錫)」[蘇頌校本草圖經二十卷]の著録がある。

128) 郭注に「即蝥蠡」。

129) 「蝥」(44a) 説解。

45b

𧈧，𧈧也^(一)，从虫𧈧聲^(二)，𧈧，籀文強，从𧈧，从彊^(三)，

強，𧈧也，虫に从ふ，𧈧¹³⁰⁾の聲，𧈧，籀文の強，𧈧に从ひ，彊に从ふ，

(校) 大徐「強」を「強」に作る。

(一) 下に「𧈧、強也」と云ふ。¹³¹⁾ 二字轉注爲り。釋蟲に曰く「強は醜掙」，郭曰く「腳を以て自ら摩掙す」と。段借して彊弱の「彊」¹³²⁾と爲す。

(二) 此の聲六部に在り而して強十部に在る者は合韻也。巨良の切。¹³³⁾

(三) 此れに據れば則ち「強」なる者は古文。秦刻石文「強」を用ふ。¹³⁴⁾ 是れ古文を用ひて小篆と爲す也。然して「強」を以て「彊」と爲すは是れ六書の段借也。

𧈧，強也，从虫斤聲^(一)，

𧈧，強也，虫に从ふ，斤の聲，

(一) 巨衣の切，古音は十三部に在り。¹³⁵⁾

𧈧，葵中蠶也^(一)，从虫，上目象蜀頭形，中^(二)，象其身蛸蛸^(三)，詩曰，蛸蛸者蜀^(四)，

蜀，葵中の蠶也，虫に从ふ，上目は蜀頭の形に象り，中は其の身蛸蛸たるに象る，詩に曰く，蛸蛸たる者は蜀と，

(一) 「葵」，『爾雅』釋文引きて「桑」に作る。¹³⁶⁾ 『詩』に曰く「蛸蛸たる者は蠶，蒸しく桑野に在り」と。「桑」に作るを長と爲すに似たり。毛傳に曰く「蛸蛸は蠶の兒，蠶は桑蟲也」。¹³⁷⁾ 傳は「蟲」と言ひ、許は「蠶」と言ふ者は蜀は蠶に似れば也。『淮南子』に曰く「蠶は蜀と相

130) 「𧈧」は「弘」。經韻樓本では乾隆の諱を避けて「弘」を使用しない。

131) 十三篇上 45b。

132) 十二篇下 58b 弓部「彊，弓有力也」段注「引申爲凡有力之稱」。

133) 「此の聲」は弘聲。古十七部諧聲表でム聲（「弘」の聲符）は六部，強聲、彊聲は十部，今韻古分十七部表で陽韻（巨良切）は十部。『繫傳』に「弘與強聲不相近」。

134) 嶧山刻石に「滅六暴強」。彊弱の「彊」として用いられている。「強」に作ることにについて、『繫傳』に「秦刻石文從口，疑從籀文省」，また畢沅『關中金石記』卷一・繹山碑に「秦刻不傳，即宋徐鉉所摹，……，又強作強，上變口，……，此皆於六書之正不合，或是古本磨泐，鉉臨寫時以意增改，未可知」（續修四庫全書本に據る）。

135) 斤聲は古十七部諧聲表で十三部，微韻（巨衣切）は今韻古分十七部表で十五部。

136) 釋蟲「𧈧，烏蠶」の釋文に「蠶，音蜀，說文云，桑中蟲也，……」。

137) 爾風・東山。阮元本は「蒸」を「烝」に作り，傳は「桑」上に「蠶」字が無い。傳に「烝，實也」，箋に「古者聲實、填、塵同也」といい，疏は釋詁下の「塵，……，久也」を引き箋の意圖を説明しているので，ここでは「蒸」を「久」と解釋しておく。

ひ類し而して愛憎異なる也」と。¹³⁸⁾ 桑中の蠹は即ち蝨蟻なり。

(二) 「勺」を謂ふ。

(三) 市玉の切，三部。

(四) 爾風の文。今左旁又た「虫」を加ふるは非也。

蠹，馬蠹也^(一)，从虫，𠂔象形^(二)，益聲^(三)，明堂月令曰，腐艸爲蠹^(四)，

蠹，馬蠹也，虫に从ふ，𠂔は象形，益の聲，明堂月令に曰く，腐艸 蠹と爲ると，

(校)「虫」下，大徐「𠂔象形」三字無く「目」字有り，「益聲」下「了象形」三字有り。祁刻本「了」を「𠂔」に作る。

(一)「馬蠹」は亦た馬蚊と名づけ，亦た馬蚘と名づけ，亦た馬蠶と名づく。『呂覽』仲夏紀、『淮南』時則訓高注に見ゆ。¹³⁹⁾ 而して『爾雅』釋蟲「蚘は馬蠶」，郭注して「馬蠹は蚘，俗に馬蠶と呼ぶ」と。¹⁴⁰⁾『方言』に曰く，馬蚊の「大なる者は之れを馬蚘と謂ふ」と。¹⁴¹⁾「蚘」「蠶」同字也。『莊子』は之れを「蚊」と謂ふ。¹⁴²⁾ 多足の蟲也。今 巫山夔州の人謂之れを艸鞵絆と謂ひ，亦た百足蟲と曰ふ。茅茨陳び朽つれば則ち多く之れを生ず。故に『淮南』、『呂覽』皆な「腐艸化して蚘と爲る」と曰ふ。高注して「蚘は讀みて蹊徑の蹊の如くす」¹⁴³⁾と曰ふは是れ也。其れ『淮南』に注して「一に曰く，熒火」と云ふ¹⁴⁴⁾は，乃ち異説を備ふ。鄭戴『記』「腐艸 熒と爲る」に注して「熒は飛蟲，熒火也」と曰ふ¹⁴⁵⁾は，蓋し古文古説に非ず。

(二)「蜀に从ふ」と云はざる者は，物 蜀の類に非ず，又た書に蜀部無ければ也。

(三) 益聲は十六部に在り。故に「蠹」の古音は圭^{ケイ}の如し。¹⁴⁶⁾『韓詩』に「吉圭し簠を爲る」，『毛

138) 説林訓。原文は「今蟬之與蛇，蠹之與蠹，狀相類而愛憎異」。今本は「蜀」を「蠹」に作る。

139) 『呂氏春秋』は季夏紀。いずれも「腐草化為蚘」，『呂氏春秋』高注に「蚘，馬蚊也，蚘讀如蹊徑之蹊，幽州謂之秦渠，一曰螢火也」，『淮南子』高注に「蚘，馬蚊也，幽冀謂之秦渠，蚘讀奚徑之徑」。また『淮南子』兵略訓に「故良將之卒，……，若蚘之足」高注に「蚘，馬蠶也」

140) 阮元本は「蚘」を「蠶」に作る。釋文は「蚘」を出して「音閑」。

141) 卷 11「馬蚊，北燕謂之蛆蠶，其大者謂之馬蚘」，郭注に「音逐」。

142) 秋水「夔憐蚊，蚊憐蛇，……，夔謂蚊曰，吾以一足跨蹕而行，予無如矣，今子之使萬足，獨奈何，……，蚊謂蛇曰，吾以衆足行，而不及子之無足，何也」。

143) 今本は『呂氏春秋』注同じ，『淮南子』注は「如蹊徑之蹊」を「奚徑之徑」に作る。注 139 参照。

144) 今本では『呂氏春秋』注には見えるが(但し，「熒」を「螢」に作る)，鴻烈集解本，集釋本『淮南子』注には見えない。注 139 参照。漢魏叢書本『淮南子』は未見だが，『段注攷正』に「漢魏叢書本如是」と。

145) 阮元本『禮記』月令は「艸」を「草」に「熒」を「螢」に作る。釋文は「為熒」を出して「本又作螢，戸局反，螢，火蟲也，或作腐草化為螢者非也」。

146) 小雅・天保の釋文に「吉蠹，古玄反，舊音圭，絜也」。圭の今音は『廣韻』に據れば齊韻(古攜切)なので，今韻古分十七部表では十五部だが，古十七部諧聲表では益聲のみならず，蠹聲，圭聲も十六部。『六書音均表』一・古假借必同部説に「古本音不同今音，故如夏小正借養爲永，詩，儀禮借蠹爲圭，古永音同養，蠹音同圭也」。

詩「吉蠲」に作る。¹⁴⁷⁾「蠲」は乃ち「圭」の段借字也。唐詩「水搖れ文蠲動く」¹⁴⁸⁾、亦た尙ほ讀みて^{ケイ}桂の如くす。音轉じて乃ち古懸の切に讀む。

(四) 許據る所の者は古文古説なり。¹⁴⁹⁾

46a

蠲，齧牛蟲也^(一)，从虫^𧈧聲^(二)，

蠲，牛を齧る蟲也，虫に从ふ，^𧈧の聲，

(一) 今人 齧狗蟲と謂ふ。語亦た同じ。『通俗文』に曰く「狗蟲を蠲と曰ふ」と。¹⁵⁰⁾

(二) 邊兮の切，十五部。

𧈧，尺蠖^(一)，詘申蟲也^(二)，从虫^萑聲^(三)，

蠲，尺蠖は詘申する蟲也，虫に从ふ，^萑の聲，

(校)「詘」，大徐、祁刻本「屈」に作る。

(一) 逗。疊韻字。

(二)「詘」各本「屈」に作るは非，今正す。「詘」なる者は「詰詘する也」¹⁵¹⁾，曲也。『易』𧈧

147) 小雅・天保。この句は『周禮』秋官・蜡氏「令州里除不蠲」注に「蠲讀如吉圭惟籩之圭，圭，絜也」，疏に「云蠲讀如吉圭惟籩之圭者，毛詩云，絜蠲為籩，無此言，鄭從三家詩，故不同」，『儀禮』士虞禮「饗辭曰，哀子某，圭為而哀薦之饗」注に「圭，絜也，詩曰，吉圭為籩，……」のように引かれる。『韓詩』について、『詩經小學』卷16「吉蠲為籩」條は「韓詩吉圭為籩」とするが、『周禮漢讀考』卷5「令州里除不蠲注」條では『周禮』蜡氏注疏や『儀禮』士虞禮注を引き「詩云吉蠲為籩，鄭注三禮時，多不從毛詩，此引吉蠲，恐亦是三家詩有作蠲者耳，孔賈在唐初，韓詩尚存，於兩吉圭，皆未質言韓詩，而宋董道詩故，乃以吉圭係韓嬰章句，殊不可信」という。『宋史』藝文志に「董道廣川詩故四十卷」の著録がある。

148) 「蠲」でなく「鷁」なら、『唐詩紀事』卷1太宗・賦得浮橋詩に「水搖文鷁動，纒轉錦花繁」。「文鷁」は司馬相如の子虛賦（『史記』司馬相如傳、『漢書』司馬相如傳上、『文選』卷7）に見え『漢書』注に「張揖曰，鷁，水鳥也，畫其象於船首，淮南子曰，龍舟鷁首，天子之乘也」とあり，天子の船を指す。

149) 「明堂月令」については，四篇下骨部「𧈧，……明堂月令曰，……」段注に「大戴禮盛德篇云，明堂月令，盧辨曰，於明堂之中施十二月之令也。按漢志說禮云，明堂陰陽三十三篇，古明堂之遺事。月令蓋三十三篇之一。許偁月令皆云明堂月令」。また、『禮記』月令疏引く鄭玄『（三禮）目録』に「名曰月令者，以其記十二月政之所行也，本呂氏春秋十二月紀之首章也，以禮家好事抄合之，後人因題之名曰禮記，言周公所作，其中官名、時、事多不合周法，此於別錄屬明堂陰陽記」という。

150) 玄應『一切經音義』卷11正法念經第十卷に「蠲等，補兮反，通俗文，狗虱曰蠲，……」。『一切經音義』は「蠲」を「風」に作る。

151) 三篇上29b言部「詘」説解。段注に「二字雙聲，屈曲之意」。八篇下2b尾部に「屈，無尾也」。また、『禮記』樂記「屈伸俯仰」阮元校勘記に「按説文作屈申，段玉裁云，屈亦作詘，所謂隨體詰詘也，伸古經傳皆作信，周易詘信相感而利生焉，又尺蠖之詘以求信也」。

辭に曰く「尺蠖の詘するはは以て信びんことを求むる也」。¹⁵²⁾「信」は古への「伸」字。¹⁵³⁾釋蟲に曰く「蠖は尺蠖」注に「今の蚺蠖」と。¹⁵⁴⁾『方言』に曰く「蠖蚺は之れを蚺蠖と謂ふ」, 注に「又た歩屈と呼ぶ」と。¹⁵⁵⁾

(三) 烏郭の切, 五部。

蝻, 復陶也^(一), 劉歆説, 蝻, 蠹蠹子也^(二), 董仲舒説, 蝻, 蝗子也^(三), 从虫彖聲^(四),
蝻, 復陶也, 劉歆説, 蝻は蠹蠹子也, 董仲舒説, 蝻は蝗子也, 虫に从ふ, 彖の聲,

(校) 大徐、祁刻本「蠹蠹」を「蚺蚺」に作り、「董」上に「也」無く、「蝗」上に「蝻」字無し。

(一) 釋蟲に曰く「蝻は蝻蚺」と。¹⁵⁶⁾俗字は虫に从ふ也。『國語』に曰く「蟲は蚺蝻を舍く」, 韋注して「蝻は蝻蚺也, 以て食す可し」と。¹⁵⁷⁾按ずるに此の説蓋し下文二説と畫然として三爲り。郭『爾雅』に注する¹⁵⁸⁾は則ち董説に牽合する^{のみ}耳。「復陶」は未だ今に於いて何物なるかを知らず。

(二) 此れ下の董説と皆な『春秋』を説く也。宣十五年「冬, 蝻生ず」。五行志に曰く「劉歆以爲く, 蝻は蚺蠹の翼有る者, 穀を食するを災と爲す」と。¹⁵⁹⁾按ずるに志に「翼有り」と云ひ, 此こに「子」と云ひ, 亦た異なる。

(三) 何『公羊』に注して曰く「蝻は即ち蝻也, 始めて生ずるを蝻と曰ひ, 大なるを蝻と曰ふ」。¹⁶⁰⁾五行志に曰く「董仲舒、劉向以爲く, 蝗始めて生ずる也」と。¹⁶¹⁾「蝻」は即ち「蝻」字。¹⁶²⁾董、何説同じき也。

152) 繫辭傳下。阮元本は「詘」を「屈」に作る。

153) 三篇上 13a 言部「信, 誠也」, 段注に「古多以爲屈伸之伸」。

154) 阮元本は「尺」を「蚺」に作る。疏に「方言云, 蠖蚺謂之蚺蠖, 郭云, 又呼歩屈, 説文云, 蠖, 屈伸蟲也, 易繫辭云, 尺蠖之屈, 以求信者, 是也」。

155) 卷 11。郭注「即、踰二音, 蠖, 烏郭反, 又呼歩屈」。

156) 注に「蝗子未有翅者」。釋文「蝻, 以全反, 字林尹絹反, 説文云, 劉歆説蚺蚺子也, 董仲舒説蝗子也, 何休注公羊云即蝻也, 始生曰蝻, 長大曰蝻, 杜預亦云蝻子, 郭依董説」。

157) 魯語上。明道本は「蝻蚺」を「蝻陶」に作る。『補音』は「注復陶」を出して「復, 芳目反, 字林作蝻, 下音桃, 補音徒刀反, 今按爾雅, 蝻陶, 蝗子也, 此但作復陶, 古字通, 音則從爾雅」。董增齡『正義』は「復陶」に作る。『爾雅』「蝻, 蝻蚺」注「外傳曰, 蝻舍蚺蝻」疏に「此魯語里革諫宣公之辭也, 韋氏解曰, …… , 蝻, 蝻蚺也, 可食」。段注は『爾雅』疏引く所に據るか。

158) 注 156 参照。

159) 中之下「宣公十五年, 冬, 蝻生, 劉歆以爲蝻, 蚺蠹之有翼者, 食穀爲災, 黑眚也, 董仲舒、劉向以爲蝻, 蝻始生也, 一曰, 蝻始生」顔注「孟康曰, 蚺蠹, 音蚺蚺」。(補注本に據る)

160) 宣公十五年傳「冬, 蝻生, 未有言蝻生者, 此其言蝻生何」注。

161) 注 159 参照。『補注』本は「始」字上をいづれも「螟」に作るが、『補注』に「葉德輝曰, 下螟爲蝗之誤, 既云一曰, 則非螟明矣」という。

162) 十三篇下 1b 蝻部「蝻, 蝗也, …… , 蝻, 蝻或从虫眾聲」。

（四）與專の切，十四部。

46b

𧈧，蝮蛄也^(一)，从虫婁聲^(二)，一曰，𧈧，天蝮^(三)，

蝮，蝮蛄也，虫に从ふ，婁の聲，一に曰く，𧈧は天蝮と，

（一）今の土狗也。

（二）洛侯の切，四部。

（三）釋蟲の文。郭注して云く「蝮蛄也」と。按ずるに郭に依れば則ち此の「一に曰く」は猶ほ「一名」のごとき耳^{のみ}。但だ恐らくは郭注未だ安からず。『方言』に「蝮蟄，或いは之れを蝮𧈧と謂ひ，或いは之れを天蝮と謂ふ」と。¹⁶³⁾ 則ち蝮蛄に非ざる也。許書「𧈧」字無し。

𧈩，蝮蛄也^(一)，从虫古聲^(二)，

蛄，蝮蛄也，虫に从ふ，古の聲，

（一）『孟子』「蠅蛄姑 之れを嘍ふ」。「蛄」，一に「蝮」に作る。或いは云く「蝮蛄は即ち蝮蛄也」と。¹⁶⁴⁾

（二）古乎の切，五部。

𧈪，蠶丁，蠶也^(一)，从虫龍聲^(二)，

蠶，蠶丁は蠶也，虫に从ふ，龍の聲，

（校）大徐、祁刻本「丁」上に「蠶」無し。

（一）按ずるに此れ當に「蠶丁」に於いて逗と爲すべし。各本「蠶」字を刪る者は非也。『爾雅』を讀む者、「丁蠶」を以て句と爲すも亦た非なり。「蠶丁」は「蠶」の一名耳。『爾雅』「丁」を「杙」に作る。¹⁶⁵⁾

（二）盧紅の切，九部。

𧈫，羅也^(一)，从虫我聲^(二)，

蛾，羅也，虫に从ふ，我的聲，

163) 卷11「蝮蟄，……，自關而東謂之蝮蟄，……，或謂之蝮𧈧，……，秦晉之間謂之蠶，或謂之天蝮，……」。

164) 滕文公上。孫奭『音義』に「蠅蛄姑，張音涵，云，諸本或作蝮，誤也，丁云，蝮未詳所出，或以蝮與蠅同，謂蝮蠅也，音由，又一說云，蝮蛄即蠅蛄也」。

165) 釋蟲に「蚘蛄，大蠶，小者蠶，蠶，杙蠶」。段注に據れば「蠶杙，蠶」とすべきだが，「蠶杙蠶」注に「赤駁蚘蛄」疏に「其大而赤色斑駁者，名蠶，一名杙蠶」とみえ，ここでは疏に據る。

(一)「蛾は羅」は釋蟲に見ゆ。¹⁶⁶⁾許 此こに次づるは當に是れ蠶，一名蛾なるべし。古書「蛾」を説きて蠶蠶と爲す者多し矣。¹⁶⁷⁾「蛾」は是れ正字，「蟻」は是れ或體。許の意は此の「蛾」は是れ蠶，蝻部の「蠶」¹⁶⁸⁾は是れ蠶蠶。二字別有り。郭『爾雅』「蛾は羅」に注して「蠶蠶¹⁶⁹⁾」と爲すは許の意に非ざる也。『爾雅』「蠶」字，本或いは蛾に作る。¹⁷⁰⁾蓋し古へ二字雙聲に因りて通用す。之れを要するに本は是れ一物，段借に非ざる也。

(二)五何の切，十七部。今音は則ち魚綺の反，十六部に在り。¹⁷¹⁾

47a

蠶，蠶蠶也^(一)，从虫豈聲^(二)，

蠶，蠶蠶也，虫に从ふ，豈の聲，

(校)大徐、祁刻本「蠶蠶」を「蚘蚘」に作る。

(一)俗に「蚘蚘」に作るは是に非ず。今正す。蟲部に曰く「蠶蠶は大蠶也」と。¹⁷²⁾之れを析言する也。之れを渾言すれば則ち凡そ蠶は皆な蠶蠶と曰ふ。『爾雅』「蚘蚘は大蠶，小なる者は蠶」¹⁷³⁾，亦た是れを析言す。

(二)魚綺の切，按ずるに當に魚豈の切なるべし。古音は十五部に在り。¹⁷⁴⁾『廣韻』尾韻に入る者は古音也。紙韻に入る者は「蟻」字に縁りて而して之れを合する也。

蚘，蠶子也^(一)，从虫氏聲^(二)，周禮有蚘醢^(三)，讀若祁，𧈧，籀文蚘，从虫，𧈧，古文蚘，从辰土^(四)，

蚘，蠶子也，虫に从ふ，氏の聲，周禮に蚘醢有り，讀みて祁の若くす，𧈧，籀文の蚘，虫に从ふ，𧈧，古文の蚘，辰土に从ふ，

(校)祁刻本「祁」を「祈」に作る。

166) 阮元本經文は「蛾」を「蠶」に作る。郭注に「蠶蠶」。阮元校勘記に「元本、閩本、監本同，雪臆本、毛本蠶作蚕，誤，釋文蠶徂南反，下同」。釋文に「蠶，本又作蛾，說文同，我河反」。

167) 『禮記』學記「蛾子時術之」鄭注、『山海經』海内北經「朱蛾其狀如蛾」郭注いづれも「蛾，蚘蚘也」。

168) 十三篇下 1a 蝻部「蠶，蠶比飛蠶」(二徐本は「匕」を「化」に作る)。

169) 阮元本は「蠶」を「蠶」に作る。注 166 参照。

170) 釋蟲「蚘蚘，大蠶」釋文に「蠶，魚綺反，本亦作蛾，俗作蟻，字音同，案說文，蟻，羅也，蟻或作義，蛾蠶化飛蛾也，並非蠶字」。

171) 「蛾」は『廣韻』では我(五何切)小韻(歌韻)、蠶(魚綺切)小韻(紙韻)の二箇所に見える。我聲は古十七部諧聲表で十七部。

172) 十三篇下 5a「蠶」説解。但し，二徐本は「蠶蠶」を「蚘蚘」に作る。

173) 釋蟲。

174) 豈聲は古十七部諧聲表では十五部。今韻古分十七部表では魚豈切(尾韻)は十五部だが，魚綺切(紙韻)は十六部。

（一）釋蟲に曰く、「螳子は蚺」，郭云く「蟻の卵」也と。^{175）}『周禮』饋食の豆に「蚺醢」有り，鄭曰く「蚺は蛾子」と。^{176）}『國語』「蟲は蚺蝮を舍く」，韋注同じ。^{177）}

（二）直尼の切，十五部。

（三）天官醢人の文。

（四）「土に从ふ」なる者は土中に出づれば也。「辰に从ふ」なる者は辰の聲也。古へ氏聲、辰聲相ひ似たり。^{178）}「祗」、「振」字通用するは是れ其の例。^{179）}

𧈧，自𧈧也^(一)，从虫樊の聲^(二)，

𧈧，自𧈧也，虫に从ふ，樊の聲，

（一）召南「趨趨たる阜螽」，傳に曰く「阜螽は𧈧也」「趨趨は躍也」と。^{180）}

（二）附袁の切，十四部。

𧈩，悉𧈩也^(一)，从虫帥聲^(二)，

𧈩，悉𧈩也，虫に从ふ，帥の聲，

（一）唐風「蟋蟀 堂に在り」，傳に曰く「蟋蟀は蜚也」と。^{181）}按ずるに許書に「蜚」字無し。今人「蝻」を段りて之れと爲す。^{182）}

（二）所律の切，十五部。按ずるに「蟋」「蟀」皆な俗字。

47b

𧈪，馬𧈪也^(一)，从虫面聲^(二)，

175) 原文は「蚺蝮，大蝮，小者蝮，……，蠶，飛蝮，其子蚺」注に「蚺，蟻卵」。

176) 天官・醢人に「掌四豆之實，……饋食之豆，其實……、蚺醢、……」。

177) 魯語上。明道本草注は「蚺，蟻子也，可以為醢」，『補音』は「注蝮子」を出して「補音魚倚反，今多作蟻，說文無」。董增齡『正義』は「蟻」を「蝮」に作る。『爾雅』「蝮，蝮𧈪」注「外傳曰，蟲舍蚺蝮」疏に「此魯語里革諫宣公之辭也，韋氏解曰，蚺，蝮子也，可以為醢蝮」。段注は『爾雅』疏引く所に據るか。

178) 古十七部譜聲表では氏聲は十五部，辰聲は十三部。

179) 例えば『禮記』内則に「相曰，母某敢用時日，祗見孺子」鄭注に「祗，敬也，或作振」といい，『尚書』皋陶謨に「日嚴祗敬六德」，『史記』夏本紀は「祗」を「振」に作る。また『楚辭』離騷「又何芳之能祗」について，王念孫『讀書雜誌餘編』下卷に「引之曰，祗之言振也，言于進務入之人，委蛇從俗，必不能自振其芬芳，非不能敬賢之謂也」という。

180) 草蟲。阮元本などでは「趨趨」の訓が「阜螽」の訓の上にある。

181) 蟋蟀。

182) 『增韻』三鍾・蝻（渠容切）小韻，『古今韻會舉要』二冬・蝻（渠容切）小韻，『洪武正韻』一東・窮（渠容切）小韻「蜚」下いずれも「蟋蟀」と訓じ「通作蝻」という。

𧈧，馬蛭也，虫に从ふ，面の聲，

(一) 釋蟲と同じ。¹⁸³⁾ 凡そ「馬」と言ふ者は大なるを謂ふ。「馬蛭」なる者は蛭の大なる者也。『方言』に曰く「蟬，其の大なる者は之れを𧈧と謂ひ，或いは之れを𧈧馬と謂ふ」と。¹⁸⁴⁾ 「𧈧」「馬」二字誤倒す。此の篆下文「蛭」「蟬」「𧈧」「𧈧」¹⁸⁵⁾ 諸篆と伍を爲さず。其の故を得ず。恐らくは是れ淺人之れを亂す^{のみ}耳。

(二) 武延の切，十四部。

𧈧，𧈧𧈧^(一)，不過也^(二)，从虫當聲^(三)，

𧈧，𧈧𧈧は不過也，虫に从ふ，當の聲，

(一) 逗。

(二) 皆な蟪蛄の別名。

(三) 都郎の切，十部。

𧈧，𧈧也，从虫襄聲^(一)，

𧈧，𧈧也，虫に从ふ，襄の聲，

(一) 汝羊切。十部。

𧈧，堂娘也^(一)，从虫良聲^(二)，一名斫父^(三)，

娘，堂娘也，虫に从ふ，良の聲，一名斫父，

(校)「斫」，大徐本、祁刻本「斫」に作る。

(一) 堂娘は𧈧𧈧と一語，小しく異なる耳。

(二) 魯當の切，十部。

(三) 「斫」，各本「斫」に作る。今『爾雅』音義¹⁸⁶⁾に依りて正す。堂娘は臂に斧能く斫る有り。故に斫父と曰ふ。郭云く「江東呼びて石娘と爲¹⁸⁷⁾す」と。「石」は即ち「斫」。今江東 斫郎と呼ぶ。

𧈧，𧈧^(一)，堂娘子^(二)，从虫肖聲^(三)，

183) 郭注に「蛭中最大者爲馬蛭」。

184) 卷 11。『箋疏』本郭注に「按爾雅云，𧈧者馬蛭，非別名𧈧馬也，此方言誤耳」。

185) いずれも十三篇上虫部。50b に「蛭，蟬也」「蟬，目旁鳴者」，51a に「𧈧，𧈧鹿，蛭寮也」「𧈧，𧈧，蛭寮也」。

186) 釋蟲「莫𧈧，𧈧娘，𧈧」注「𧈧娘有斧蟲，江東呼石娘」（阮元校勘記に「唐石經、單疏本𧈧作𧈧。當據以訂正，說文作堂娘」「閩本、監本、毛本𧈧作𧈧，非，𧈧依經作𧈧」）釋文に「𧈧娘，說文云，名斫父」。

187) 阮元本「爲」字無し。上注參照。校勘記に「單疏本、雪牕本、注疏本作江東呼爲石娘，此脫爲字」。

蛸，**蠹**蛸は堂娘子，虫に从ふ，肖の聲，

（一）逗。

（二）月令，仲夏の月に「螻娘生ず」，注に云く「螻娘は蠹蛸の母也」と。『鄭志』に「王瓚問ひて曰く，爾雅 莫絡，螻娘は同類の物也，今沛魯以南は之れを螻娘と謂ひ，三河の域は之れを螻娘と謂ひ，燕趙の際は之れを食厖と謂ひ，齊濟以東は之れを馬敷と謂う。然るに其の子に名づくれば則ち同じく蠹蛸と云ふ。是を以て注に蠹蛸の母也と云ふ」と。¹⁸⁸⁾ 按ずるに堂娘の卵は木に付き，堅韌にして動かす可からず。小暑に至りて子羣生す焉。

（三）相邀の切，二部。按ずるに「**蠹**」字¹⁸⁹⁾ は**蝮**に从ふ。故に**蝮**部に入る。凡そ一物二字にして部を異にする者，此れに例ふ。

蚺，**蝮**蝮^(一)，目翼鳴者^(二)，从虫并聲^(三)，

蚺，**蝮**蝮は翼を目て鳴く者，虫に从ふ，并の聲，

（一）逗。

（二）「**蝮**」各本「**蝗**」に作る。¹⁹⁰⁾ 今正す。釋蟲に曰く「**蝮**蝮は**蚺**」，郭云ふ「甲蟲也，大いさ虎豆の如し，綠色，今江東黃瓶と呼ぶ」と。¹⁹¹⁾ 按ずるに「**蝮**蝮」は即ち「**蝮**蝮」也。「翼を以て鳴く者」は考工記梓人鄭注に見ゆ。「翼もて鳴くは發皇の屬」。¹⁹²⁾ 「發皇」は即ち「**蝮**蝮」也。

（三）薄經の切，十一部。

48a

蝮，**蝮**蝮，**蚺**也^(一)，从虫喬聲^(二)，

蝮，**蝮**蝮，**蚺**也，虫に从ふ，喬の聲，

（校）大徐本、祁刻本「**蚺**」字無し。

（一）「**蚺**」字今補ふ。此れ轉注の例也。

188) 『隋書』經籍志・經・論語に「鄭志 十一卷 魏侍中鄭小同撰」。鄭小同は鄭玄の孫（『後漢書』鄭玄傳に「玄唯一子益恩，……，有遺腹子，玄以其手文似己，名之曰小同」）。『藝文類聚』卷 97 螻娘條引く所は鄭志と明記しない。

189) 十三篇下 2b に「蠹，蠹蛸也，……，蝮，蠹或从虫」。

190) 孫本、祁刻本は「**蝮**」に作る。鈕樹玉『說文解字校録』は「**蝗**」に作るが、「宋本及繫傳蝗作蝮，是也」といい、姚文田・嚴可均『說文校議』に「御覽卷九百五十一引作蝮蝮也，宋本亦作蝮，此蝮誤」という。

191) 阮元本は「**黃**」下「**瓶**」上に「**蚺**音」二字有り。校勘記「雪認本同，注疏本刪下二字，釋文蚺郭音瓶，經義雜記曰，考工記梓人為荀虞疏引此注云，今江東呼為黃蚺，按一切經音義卷十五引此注云，江南呼為黃瓦，亦有為字，瓦即瓶之訛」。

192) 「為荀虞，……，以脰鳴者，……，以翼鳴者，……，謂之小蟲之屬，以為雕琢」注。疏に『爾雅』釋蟲「**蝮**蝮，**蚺**」を引き郭注「呼」下を「為黃蚺」に作る。

(二) 余律の切，十五部。

蟻，蟻蟻也^(一)，从虫黃聲^(二)，

蟻，蟻蟻也，虫に从ふ，黃の聲，

(一) 乎光の切，十部。

𧈧，姑蠶^(一)，強羊也^(二)，从虫施聲^(三)，

蠶，姑蠶は強羊也，虫に从ふ，施の聲，

(校)「姑」，孫本「𧈧」に作る。¹⁹³⁾「羊」，孫本、祁刻本「𧈧」に作る。

(一) 逗。

(二)「羊」釋文引く所¹⁹⁴⁾及び宋本¹⁹⁵⁾此くの如し。當に音陽なるべし。蓋し今江東の人麥中の小黑蟲を謂ひて羊子と爲す者は是れ也。鉉本「𧈧」に作り，李仁甫本「𧈧」に作る。¹⁹⁶⁾皆な是に非ず。釋蟲に曰く「𧈧蠶は強𧈧¹⁹⁷⁾」，郭云ふ「今米穀中の蠶 小黑蟲は是れ也¹⁹⁸⁾」，建平人呼びて𧈧子と爲す¹⁹⁹⁾」と。𧈧，亡婢反。郭音恐らくは未だ諦らめず。『方言』「姑蠶は之れを強羊と謂ふ」，字亦た正しく「羊」に作る。郭注之れを廣むるに「江東 蠶と名づく，音加，建平人𧈧子と呼ぶ，音𧈧姓」を以てす。『方言』正文を改むるを得ず「𧈧」に作る也。²⁰⁰⁾『爾雅』正文恐らくは亦た本と「羊」に作る。²⁰¹⁾

(三) 式支の切，古音は十七部に在り。²⁰²⁾

193) 姚文田・嚴可均『說文校議』に據れば，宋本、五音韻譜は「𧈧」に作り，毛本は「姑」に改めたのは『集韻』五支、『類篇』引く所に合うという。

194) 釋蟲「𧈧蠶は強𧈧」釋文に「𧈧，郭音𧈧亡婢反，本或作𧈧，說文作羊，字林作𧈧，弋丈反，云搔𧈧也」。

195) 未詳。

196) 姚・嚴『說文校議』は「𧈧」に作り，「宋本及五音韻譜皆如此」。

197) 阮元校勘記に「唐石經𧈧作姑，按說文，蠶，姑蠶，強𧈧也，字亦作姑，今作虫旁非」。

198) 疏は『方言』を引いて「今米穀中小黑蠶蟲也」。阮元校勘記に「按疏云，……，此作蠶小黑蟲，誤倒」。

199) 阮元本「呼」下に「爲」字無し。注下文に「音𧈧姓」三字有り。阮元校勘記に「注疏本刪下三字，釋文𧈧郭音𧈧，疏云音楚姓𧈧之𧈧」。

200) 卷11。周祖謨『校箋』本は「羊」を「𧈧」に作り，郭注全文は「米中小黑甲蟲也，江東名之𧈧，音加，建平人呼𧈧子，音𧈧，𧈧即姓也」，羊即𧈧『箋疏』は「強」下「羊」を「𧈧」に作り，郭注は「名」を「謂」に作り，「呼」下を「羊子，羊即𧈧」に作る。箋疏に「各本作羊，即姓也，爾雅改作𧈧楚姓也，陳氏方言類聚本作羊即𧈧也，云，今吳會通呼羊子作即姓者訛，今據以改正」。

201) 『汲古閣說文訂』では「𧈧」に作り，「初印本如此，宋本、葉本、趙本、五音韻譜皆同，與爾雅音義所引說文合，爾雅作𧈧，音義曰，𧈧，說文作𧈧，是也，今剗改云姑蠶強𧈧，說文有𧈧字，無庸依集韻、類篇、小徐作姑，而改𧈧作𧈧，則雖合於爾雅、方言，而說文未嘗有𧈧字，小徐本亦不作𧈧也，不亦誣乎，集韻引亦作強𧈧○亦按爾雅音義曰，說文作𧈧，今刻云說文作羊，誤也」といひ，段注の説と異なる。段注は戴震『箋疏』の説に據るか。

202) 式支切（支韻）は今韻古分十七部表では十六部，施聲は古十七部諧聲表では十七部。

𧈧，帖斯^(一)，墨也^(二)，从虫占聲^(三)，

帖，帖斯は墨也，虫に从ふ，占の聲，

(一) 逗。

(二) 釋蟲に云く「蠹²⁰³⁾は帖蝨」，郭云く「戣の屬」と。按ずるに許「戣」下に「毛蟲也」と云ふ。²⁰⁴⁾ 此れ乃ち木葉を食するの蟲，木中の蠹に非ず。其の卵育ち自ら藏るるの殻を雀甕と曰ふ。宜しく「戣」篆と類列すべし。

(三) 職廉の切，古音は七部に在り。²⁰⁵⁾

𧈩，縊女也^(一)，从虫見聲^(二)，

覘，縊女也，虫に从ふ，見の聲，

(一) 釋蟲と同じ。郭云く「小黑蟲，赤頭，熯びて自ら^{くび}經れ死す，故に縊女と曰ふ」と。²⁰⁶⁾

(二) 胡典の切，十四部。

48b

𧈪，盧蜃也^(一)，从虫肥聲^(二)，

蜃，盧蜃也，虫に从ふ，肥の聲，

(一) 按ずるに『爾雅』「蜃は蠃蜃」と一物爲り。許書「蜃」²⁰⁷⁾は蟲部に在り，「蜃」は虫部に在り。一物と言はず。許實は見る所有る也。『唐本艸』蜃蠃を説きて「味辛辣にして臭し，漢中人之れを食す，一名蠃蜃」と。²⁰⁸⁾

(二) 符非の切，十五部。

𧈫，渠蠃^(一)，一曰天社^(二)，从虫卻聲^(三)，

蠃，渠蠃，一に曰く，天社，虫に从ふ，卻の聲，

(一) 逗。

203) 阮元本「蠹」を「蠹」に作る。釋文に「蠹，字又作蠹，亡北反」。

204) 十三篇上 44b。

205) 職廉切（鹽韻）は今韻古分十七部表で七部，占聲も古十七部諧聲表で七部。

206) 阮元本は「熯」を「喜」に作る。釋文「熯，許記反，本今作喜」。五篇上喜部に「喜，樂也」(33a)，「熯，説也」(33b) 段注に「説者今之悦字，樂者無所箸之^{カク}喜，悦者有所箸之喜，口部嗜下曰，熯欲之也，然則熯與嗜義同，與喜樂義異，淺人不能分別，認爲一字，喜行而熯廢矣」。

207) 十三篇下 5a 「蠃，臭蟲，負蟻也，……，蜃，蠃或从虫」。

208) 『重修政和證類本草』卷 21 蟲魚中品「蜃蠃」下に「唐本注云，此蟲味辛辣而臭，漢中人食之，言下氣名曰石蠃，一名盧蜃，音肥，一名負盤」。『重修政和證類本草』は「蠃」を「盧」に作る。

(二)「社」一に「柱」に作る。²⁰⁹⁾『廣韻』譌りて「神」に作る。按ずるに「渠」は即ち「蛄蜺」雙聲の轉。『玉篇』「蜺」「螂」同字と謂ふ²¹⁰⁾は是也。釋蟲に曰く「蛄蜺は蜺螂」と。²¹¹⁾莊子「蛄蜺の智は丸を轉がすに在り」と云ひ²¹²⁾、陶隱居「熹びて人糞中に入り、尿を取り丸めて卻もて之を推す、俗名推丸と爲す」²¹³⁾と云ひ、羅願「一に前行し後兩足を以て之を曳く、一に後ろ自りして推しこれを致し、乃ち地を坎し丸を納む、數日ならずして蜺螂其の中自り出づる有り」²¹⁴⁾と云ふ。玉裁謂らく、此の物 前卻もて丸を推す、故に渠と曰ふ。「一に曰く」は猶ほ「一名」のごとき也。『廣雅』に曰く「天柱は蜺螂也」と。²¹⁵⁾

(三) 形聲を以て會意を包ぬ。其虐の切、五部。

使用テキスト

『説文解字注』

嘉慶二十年經韻樓本影印（上海古籍出版社，1981年）

必要に應じて、下の版本を参照

嘉慶二十年經韻樓本影印（藝文印書館，1981年）

皇清經解本

同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

阮元本影印（藝文印書館，1989年）

『經典釋文』

通志堂本

必要に應じて北京図書館藏宋刻宋元遞修本を参照。

本稿は JSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

209) 注 215 参照。

210) 虫部第四百一に「蜺，丘良切，蜺螂啖糞蟲也，螂，同上，又其虐切」。

211) 注「黑甲蟲，噉糞土」疏に「蛄蜺，一名蜺螂，黑甲，翅在甲下，噉糞土，喜取糞作丸而轉之，莊子曰，蛄蜺之智在於轉丸，是也」。

212) 今本『莊子』にこの句は見えない。上注引く釋蟲疏に見える。崔豹『古今注』卷中・魚蟲に「莊周曰」として、この句を引く。

213) 『重修政和證類本草』卷 22「蜺螂」條に「陶隱居云」として引かれる。『重修政和證類本草』は「熹」を「喜」に作る。

214) 『爾雅翼』25 釋蟲二に見えるが、「坎地」を「掘地爲坎」に作る。

215) 今本『廣雅』は「社」に作る。『太平御覽』卷 946 引く所は「柱」に作る。